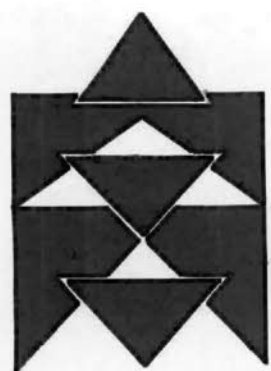


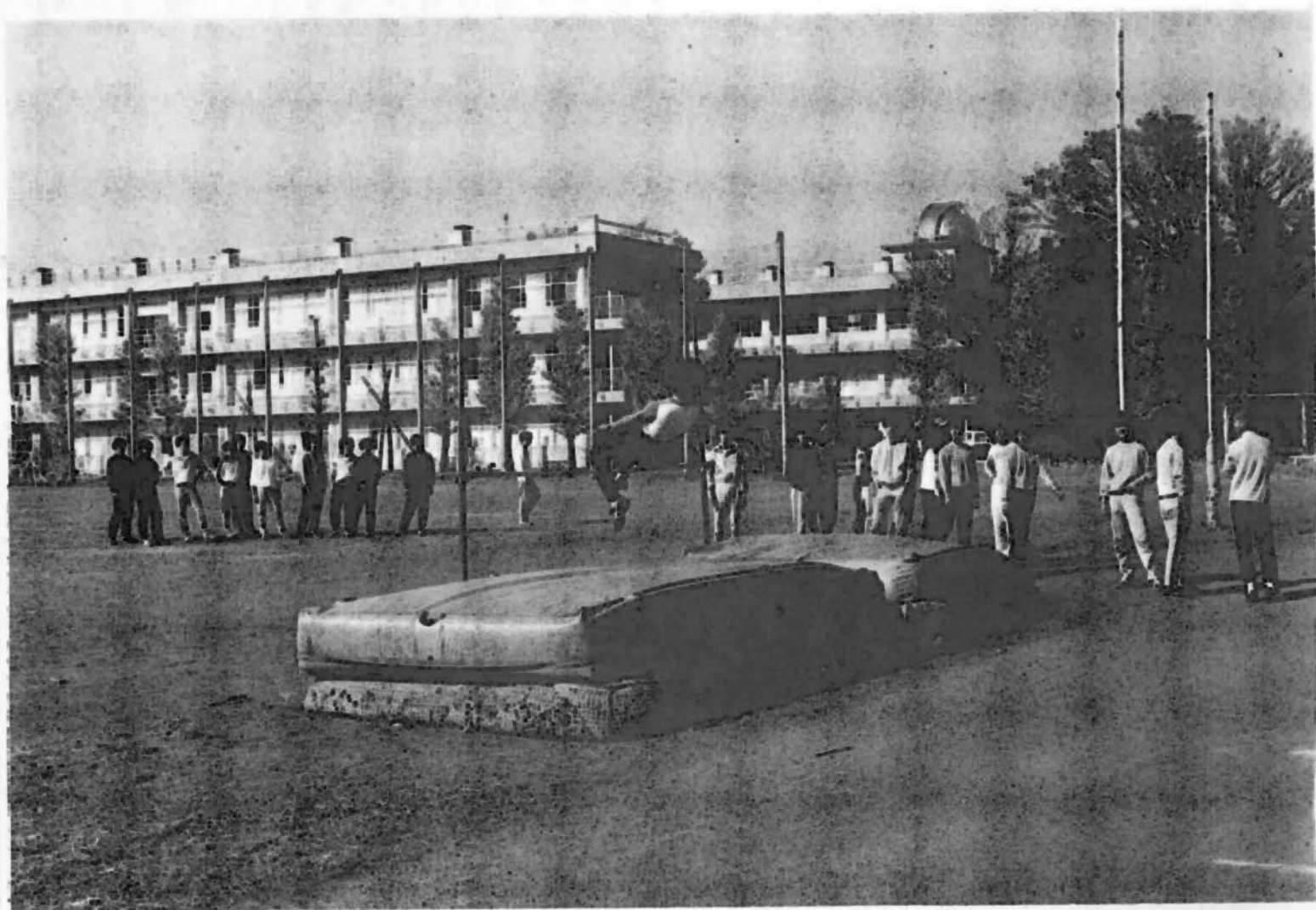
1983



高崎高校同窓会報

第17号 昭和58年11月28日

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074



わが高高に更に光りと輝きを



同窓会長 原 一雄

開校以来八十六年の歴史を経たわが高崎高校が、全国に数多い高校の中にあつて、日本の運命を支える、福田、中曽根の二人の内閣総理大臣を五年以内に相ついで出したという事は、誠に空前であると共に永く本校の歴史に、輝く一頁を加えた事でありました。中曽根さんは、本年七月三十一日に母校を訪問して記念講演をし、若い人達を激励致しました。

本校の卒業生は、既に二万名を越えておりますが、政治ばかりでなく官界財界、教育芸術文化スポーツその他すべての領域に秀れた人を送り、わが高高精神の中心をなす剛直、清潔、誠実、反骨の精神と友人、隣人を思う熱い心は、郷土は勿論日本を指導する精神にまで及んでいる事を見ることは誠に同慶の至りにたえません。

五万坪に及ぶ観音山々下の景勝の土地にその建物は殆ど鉄筋の永久建築となり、運動場は八十周年を記念した同窓生の皆さんの募金によつて、一流の芝生のグラウンドとなりました。更に今年は県の力によつて、新鋭の第二体育館まで竣工致しました。先輩の皆様は、機会あれば是非この新装成った母校の、北関東に冠たる堂々たる偉容を御覧になつて頂きたいと思ひます。

わが高高は単に施設、設備だけではありません。歴代校長の文武両道を旨とす秀れた方針が徹底して、進学率に於ても県下を圧する成績を示しておりますが、尚全国に於ては低しとして目ざましい努力を続けております。スポーツに於ては、昨年の甲子園出場につづいて、野球部は関東大会に準優勝を果し、各部が相次

いで全国大会に出場する等目ざましい活躍を示しております事は心強い限りであります。

校長室には、初代校長の沢柳政太郎博士の「意気壯」の額が掲げてありますが、現在の高高が水穴校長以下各先生方の力により在校生共々整然と然も意気壯に毎日を励んでいる姿は実に頼母しく、この意気壯な心はわが同窓会の活動にまで及んで熱情をこめて母校に尽される姿には深く敬意を表さざるをえません。

この同窓会々報も本部幹事の皆さんの限らない奉仕により、一万三千の住所のわかつている同窓生会員のお手もとに届く事になっております。同窓会の常任理事、理事、期別幹事の皆様にも限りなく活躍をして頂いて忝く存じますが、本年の同窓会の総会は五十二期の方々の力により四百名を越す空前の盛会でありました。来年の総会は既に五十三期の人達が熱心にその準備を進めておられます。

また各地域、職域の同窓会の結成も盛んになり、通信制の卒業生の皆さんも熱心な同窓会活動を継続されておられ、名門のわが高高同窓会に、苦心して卒業された秀れた数多くの女性会員のおられる事も皆様に知って頂きたいと思ひます。

いよいよ九十周年を迎えるわが高高がいかなる行事によつて之を祝賀するか、目下立案中でありますがその折には何分よろしくお力添え頂きたく、終りに母校の益々の興隆と会員皆様の御隆昌を祈つてやみません。

(群馬米穀株式会社社長 二九回)

●高々同窓会報 No.17 目次

わが高高に更に光りと輝きを

同窓会長 原 一雄

ごあいさつ

学校長 水穴 再喜

文武両道の教育

副会長 柴山大五郎

野性味に富んだ個性を

PTA会長

橋爪 良恒

近況報告

敬願

小林 康男

前橋の宿で

高橋 健人

すこし離れて想う故郷

岡本 宏

つきあい

長岡 聡夫

私の回想記(その3)

吉田 一郎

消えた校名

高田 勉

高々野球部奮戦記

美斉津 且

通信教育で得たもの

山田 博久

新高会と私

清水 明

論壇「世界の中の日本」

田中 順

応援歌聖の由来について

中島 広志

中曽根首相母校来訪

中島 広志

柳川に遊ぶ

中島 広志

同窓会だより

中島 広志

東京地区

中島 広志

通信制

中島 広志

大学生からの便り

中島 広志

ヨーロッパ演奏旅行

中島 広志

東北大と高々と

中島 広志

私の大学生活

中島 広志

母校だより

中島 広志

運動部報告

中島 広志

学芸部報告

中島 広志

最近の進学状況について

中島 広志

第82回新年総会へのお誘い・本木孝雄

中島 広志

校舎裏山(写真)・67 聖徳文庫・角田匡

中島 広志

己/13 風と緑の観音山丘陵/15 会計報

中島 広志

告・庶務報告・事務局だより/20

中島 広志



ごあいさつ

学校長 水穴 再喜

赴任以来一年半が経ちました。この間同窓会の皆様には物心両面にわたるご支援、ご指導をいただき、心から感謝申し上げます。栄光ある伝統を継承し、それを発展させ、すばらしい高々を創ることに對するご熱意に感激している次第でございます。文武両道を標榜しての学校創りの成果については、後掲の「母校だより」にゆずることといたしまして、高々の変ってきた点について一言述べさせていただきます。それは、生徒と教師の信頼関係がより強く確立してきているということです。中央高校が今年の文化祭に際して県下三十余の高校にアンケート調査を実施いたしました。その中に「あなたが一番信頼している人は誰ですか」という項目があり、高々だけが「先生」という回答が上位第二位を占め、他校に比べ特異な現象を呈していたという話を聞きました。昭和四十六年に総理府が、十六万人の青少年を対象に「青少年の連帯感などに関する調査」を実施いたしました。その中に全く同じ質問項目は

ありませんが、悩みの相談先として「先生」と答えた者は五・四％しかないという事実と比較すると、まことに高々にとつて幸せなことと言えます。

教師不信、非行、校内暴力等々ともまことににぎにぎしい現代日本の学校の中で「私は先生を信頼します」と言う多数の生徒がいるということは、教師にとつては身のひきしまる思いがすることでしょうし、ますますすすぐれた教育実践を展開していくかなければなりません。生徒と教師が信頼の絆によつて結ばれた学校、それはごく当然のことでありながら、実際には稀少価値をもつというところに、現代の日本教育界の悲劇があります。

今高々は、着実にこの悲劇の舞台から去つて行きます。世界と日本人間とありとあらゆる存在に正しい認識の光をあて、相互信頼の人間関係を樹立して、大いなる学園高々をつくりあげて行きます。



文武両道の教育

副会長 柴山大五郎

私は高中を卒業して満五十年になる。残念ながら中学当時平凡々と過してしまい、余り感激した思い出も残っていない。一年生全員が桜の木の下に座らされ、四年だか五年生に取り巻かれ、生意気だと怒鳴られた事ぐらゐであらうか。このような私長の重責をお引受けして、忸怩たるものがあるが、同窓会の為にお役に立ちたいと苦慮している次第である。

最近卒業生の間に、母校に対する関心が深まり、その上会長を中心とした役員諸公の活躍と、母校教職員のご理解ある協力によつて、年々活性化されている。例えば役員会の集合の良き、活発な意見、総会への多勢の参加、母校整備のための募金活動、何れ一つ見ても、他校には見られない雰囲気であり、ご同慶に堪えない。

水穴校長の学内近況報告によつても、文武両道にわたつて県内でトップであり、顕著な成績を現わしている。そうである。文武とは変な表現であるが、適当な言葉がないので、学

業と運動競技等の成績であるご理解願いたい。学業は模擬試験の結果を他校と比較したものと聞く。現行の学制では高等学校は進学の一過程になっていると言つてもよく、(本来の主旨とは反しているが)、進学適齢期の子供を持つ親御さんは是非高々に入學させたいであらうし、在学中の親御さんは誇り高いであらう。同窓会活動は卒業生の親睦を大いに図ることが大切であるが、母校が文武両道にわたつて年々向上するように協力を惜しまないことも大切であらう。しかし、これは言い易くして至難のことである。従つて、一人でも多くの卒業生が母校に関心を持ち、一言でもよいから機会あらば激励することであらう。このような気持ちの中からよき雰囲気は醸成され、記念行事等に具体的に結実するであらう。

福田・中曾根の二人の総理を送り出した我が国唯一の名譽ある母校である。お二人に続く大人物が輩出することを心から祈念する次第である。(大和設備工事(株)取締役社長 32回)

野性味に富んだ個性を

PTA会長 橋爪 良恒

ここ数年来、次第に若返りをしつつあったPTA会長に、私が就任したことは、いささか逆行現象のようで、誠に申しわけない次第ですが、お許しをいただきたいと思ひます。

八十周年以来、高崎高校の環境もほぼ完成しつくされた感があります。新しい体育館、プールその他も出来あがり、現在、新体育館内のトレーニング室に新鋭のトレーニング機器を設備する話が、同窓会のご好意により進捗しており、あれこれ考えますと、今の生徒はまったく恵まれているというより他ありません。

時の流れの早い現代のことですから、今さら新しい高々精神を云々する気持はありませんが、永い歳月をかけて培ってきた伝統の心は失いたくないものです。永い歴史の推移の中に目を据えて母校を眺めていける同窓生と、どうしても生徒の進路という現実から目を離せないPTAとの間には、いささかの距離はありますが、会長としてせめて、そのつなぎ役に徹して一年間の任期を全うしたいと念願しております。

よく前高との比較の問題が話題にのぼっています。昔は、そんなことはお互いあまり意識せずに、それぞれみずからの長所を競い合ったも

のですが、最近では、わずか数名の東大入学者の数で、勝った負けたなど、話が狭すぎるようです。もとのびのびと自分の力を発揮できるようにしたいものです。高々の美点は、洗練されたエリート志向よりもむしろ、野性味に富んだ個性にあると思います。学校は大学入学者の質と量が問題でしょうが、同窓会では社会人となつてからの資質と根性が問われます。PTAもその辺のところが踏まえて、息のながい教育を高々の父母に訴えていきたいと思ひています。

同窓会とPTAとは、高校教育をその基盤において支える車の両輪の如きものであらうと思ひます。与えられた一年間の任期を精一杯頑張りたいと思ひますので、同窓各位の御声援を切にお願いいたします。

(44回)



近況報告

——ごあいさつにかえて——



教頭 小林 康男

昭和四十九年の四月に本校に教諭として赴任いたしましたから九年間、元気な明るい生徒たちに囲まれて楽しい教師生活を送って参りましたところ、図らずも教頭を命ぜられ、いささか慌てました。座席は横へーメートルほど移っただけですが、仕事の内容はすっかり変わり、先生方には種々ご迷惑をかけてしまいました。最近やっと馴れたところです。

この一年間の本校の歩みは着実であり、運動部、学芸部の部活動も活潑で男子普通高校の旗頭の名をほしいままにしております。学習面におきまして、じりじりと力を伸ばしつつある訳ですが、共通一次試験実施以後全国的な傾向として深く思考する態度の欠如、目先の利のための受験技術にのみ走りがち等のことが言われております。このような傾向が本校に無し、とも言えぬことであり、以前のような活気が教室に漲っていないと嘆く声も聞かれます。これは職員生徒一丸となって克服すべき課題であります。平常の授業は勿論のこと早朝或いは放課後の補習

授業に現在積極的に取り組んでおり、その成果にも見るべきものがあることは有難いことであります。素質のある生徒、研究心旺盛な教師、そして、それを信頼し委せておられる校長のもと、また、同窓会の皆様のご心両面にわたるご支援のもと、必ずや立派な成果を収め得ることを確信しております。関係各方面のお蔭で県下初の屋内総合体育館や9コースのプールも完成し、施設、設備の面では昔と比べものにならぬほど充実したわけですから、3F精神に基づき立派な生徒を育成することが我々に課せられた責務でありOB諸兄のご期待であらうかと存じ、目標に向かって全校一体となつて努力したいと思ひます。教頭としてのわたくしの任務は、高崎高校という歯車がかうまく回転するための潤滑油としての役目を果たすことであると承知いたしております。勿論、非力でありまふ故に至らぬことも多々あらうかと存じます。何とぞよろしくご指導頂きたくお願いいたします。

前橋の宿で

高橋 健人



いつものことながら、車窓に榛名、赤城が見えてくると、何となく心が弾む、そしてほっとした気分になる。考えてみると、東京の生活で、山が近くに見えないのは、何といても物足りない。

群馬の自然は、その中に育った人間の性格に強い影響を及ぼして、上州人気質というものがつくられたのであろう。

窓外の景色にみとれながら
だんだん東海道を下ってゆくうち
私はなにかものたらぬものを感じてきて

なんであろうかと自問した
激しさだ！

それが無いのだ

山も川も海も美しいが

それはそれで十分いいのだが

どこにも実になに一つ激しいものがないのだ

故郷の山河よ！

知らないうちに

汝はこんなにも深く私のうちに

しみこんでゐたか

(一九三五年 高橋元吉)

内村鑑三は、上州人を剛毅木訥と形容した。論語のこの言葉は、上州人気質の表現として適切かもしれない。私自身にも、気分的に共鳴するものがある。よく言えば、剛毅は独立自尊の精神、木訥は誠実をあらわしている。その反面、意地っぱりと不器用も意味している。

先程、生活のモットーとは問われて、モットーというようなものではないが、鑑三のいった剛毅木訥という上州人気質のいい面を大切にしたいと答えた。

しかし、いい面だけとはいかないであろう。不器用はまだいいけれど、意地っぱりはこまる、というようなことを考えていて、思い当たったのが、歌人吉野秀雄の著書「やわらかな心」である。

この言葉には、まえから強く心を引くものがあつた。モットーとしては、これがいい。剛毅木訥を心がけ

るより、やわらかな心を持ちたいとねがう方が、人間として望ましいのではないか。

「やわらかな心」のなかには、独立心も誠実も含まれていると言えるし、さらに他への思いやりの気持という、人間の結びつきの上で最も大切なものがある。

群馬の自然のなかには、きびしさ、激しさばかりではない、われわれを包んでくれる暖かさがあるではないか。

私のモットーは、やわらかな心を持つということに訂正しようかと考えた次第である。

昼頃新前橋で降りたとき、駅があまり立派になつたのに戸惑い、次の瞬間、故郷が失われたようなさびしさを覚えた。それは、ほとんど反射的に、数十年前の記憶が、萩原朝太郎の詩と重なって、あざやかによみがえってきたためである。

実は、昨年高崎駅でも同じ経験をもつた。故郷はやはり「遠き」にありて想うもの」であるかもしれない。しかし、榛名、赤城などの山容は、変つてはいない、そこに故郷があるではないか、そう思つて僅かに自ら慰めたのである。

モットーのつぎに興味はと聞かれて、山を歩くことと答える氣になつたのは、故郷を自分のなかにつなぎとめたいという願望が、意識の底にあつたからではなかつたか。

(立教大学教授・総長 34回)

第八二回高々同窓会 新年総会へのお誘い

当番期代表

本木孝雄

同窓会の皆様、お元氣でお過しの事と思います。三年前から各期の先輩方が此の設営を始められ、今年は私達五三期の当番になりました。昨年は、五二期の岡村幹事の下、群馬の玄関口である高崎ターミナルホテルで開催されました。先輩方の御努力と、選挙の関係もあり、四百余名と言う大勢の方々が御集りになりました。私達もその恩恵にあずかり、同窓会役員、学校当局と相談の上、同日同ホテルで開催することに決定致しました。一年前大きな当番期のキイをお預りしまして、今迄八一年もの長きに渡り長々と此の会を続けられた先輩方の御尽力に改めて感謝をしております。一時は私達の母校で新年総会を開き、ラグビーの名門校をお呼びして現役諸兄の若々しいプレーを見せていただくと言う案も出しました。しかし諸般の事情が許しませんでした。御多忙の一月ではありますが、皆様方御都合の上、御出席下さいます様御案内申し上げます。

期日 昭和五九年一月二八日(土)

時間 午後三時

場所 高崎ターミナルホテル

(丹頂の間)

会費 四千元

すこし離れて 想う故郷

岡本 宏



「故郷は遠きにありて想うもの」とかいすが、私の場合、東京は新宿新都心の高層ビル内に勤務している関係上、地上約二百メートルの最上階から天気がよければ上毛三山を遠望できるので、すこし離れて想う故郷ということになる。

思えば青雲の志(?)を立てて高崎の地を離れてから、早や四十二年余の歳月が流れ過ぎた。両親健在の間は海外生活六年間を除き、年に何回かは帰省していたが、このところ親戚の慶弔でもない限りご無沙汰続きである。関越自動車道あり新幹線も開

通した現在では、その気になれば一時間で行けるわけだが、年一回の級会への出席もままならぬことが多い。いっそのこと、もっと遠く離れていれば、こんな機会にこそということことで、スケジュールをやりくりしてもはせ参ずることになるのかも知れない。近過ぎて、いつでも行けると思いうから、つい無理をしなくなるのかな、などと妙な自問自答をすることになってしまふ。

来春卒業する学生の就職戦線も一段落したが、今年は採用試験の面接で、高崎高校出身の優秀な学生に出会い、お互にびっくりした。採用に決定したが、決して後輩なるが故ではない。私の会社の場合、縁故には関係なく、あくまで本人の実力次第である。企業間の生存競争が激しさを加えている現在、人材の確保如何が会社の将来を左右することになりかねない。縁故関係を重視する余り、求めている能力から著しくかけ離れた者を採用することは、お互の不幸であると思う。会社にとってはお荷物となり、本人にとっても職場で同僚について行けず、おちこぼれて一生不遇をかこつことになる。

大学への進学についても同様のことがいえるのではないだろうか。有名校でなんとか友達について行つてやつと卒業するよりも、余裕をもって勉強しながら巾広い学生生活をエンジョイする方が、どれほど楽しい

かわからない。企業としても仲間について行くタイプの社員よりも、仲間を引張って行ける社員を歓迎する。本人の性格、入社後の教育訓練により多少の差はあっても、学生時代の生き方はなかなか変らないように思われる。

大望をいだくこと、大きな目標にチャレンジすることを否定するものではない。立派なことだと思う。しかし過度の高望みは、ときに不幸を招くことにもなる。大学受験の季節を目前に控え、会社の採用試験を思い出して、いささか感ずるところを記した次第である。

実のところ、突然本会報への寄稿依頼状を受け取り面喰った。社内では概要をいえば誰かがうまく文章にまとめてくれるのだが、これだけは他人に委ねるわけに行かず、久しぶりに自分でペンを採った。その任にあらざることは承知しているが、最近はやりのカラオケでも、ときにあとの人が歌いやすい人間も必要である。あえて駄文を弄した次第。母校のますますのご発展を祈つてやみません。

(安田火災海上保険株式会社 取締役副社長 40回)

昭和12年当時の上和田の校舎



移転当時の乗附校舎
(昭和14年3月のアルバムより)



つきあい

長岡 聡夫



お世話になった高崎中学を卒えたのは、遙かに遠く昭和二十三年、今を去る三十五年前になります。眼を閉じると、少年時代のあれこれが、或は鮮明に、或は霞のかかった美しい絵となって脳裏に甦ります。

税務関係の役所でよく「無信不立」と書かれた揮毫を眼にします。論語の中の孔子と子貢の間の問答の最後の部分から採っていますが、「政治の要諦にはいろいろある。しかし、最後に残るものは軍備でも食物でもない。それは人々の信認である。それなくしては、そもそも国家は成り

立ち得ない」との含意です。税は租税法定主義に基き、高権的に賦課徴収できる法的体系になっていますが、それにもかかわらず、税の理念的あり方からして、納税者との間の信頼関係が如何に大切であるかを自戒する額を掲げているのです。これは、論語のもつ時代的制約を超えて、今日の人間関係に一般化してもなおその妥当性を失わない真理だと思っています。

昭和五十二年から三年間、大蔵省代表としてニューヨークに在動しましたが、この頃から米国では Confidence の語が頻用されていました。大統領、経済政策に対する人々の Confidence の有無、強弱が米国の進路を決定するという風の使われ方です。冷徹な合理性と数字だけで動くお国柄と想っていた米国で、唯心の「信」の概念が重視されていたのは、一つの発見でした。—その後 Expectation や Perception という「心」にからむ語が多用されるに及んで、米国の議論のたて方が、特に日本との関係で厳格な論理展開から次第に離れて行く危機を感じはじめたのも事実ですが—。

いずれにせよ、稔りある人間関係の基礎は信頼という心の在り方である点は、洋の東西を問わないようです。これは、私自身の在米中の多くの米国人や他の機会に得た外国人との付き合いを通ずる経験からしても、

校舎変遷



改築前の乗附校舎全景と玄関

間違いないと思います。

信頼を呼び込む動因にはいろいろあるようです。米国着任早々に、私のアメリカ人観を一挙に好転させた出来事がありました。車を手に入れた間もないある日、事務所の近くの路上にやっと駐車できそうな間隙を見つけました。車を止めてリアビューミラーで後を見ると大きなトラックが来ます。横を通り抜けるだけの道幅はありません。怒るだろうが待たせてしまえと意を決し、駐車作業にとりかかりました。しかし隙間は思ったより狭く、焦るためにますます慌てて仲々思うように行きません。前に出たり後にさがったり、大汗をかき相当の時間をかけてやっと車は納まるところに納まりました。急い

で車から飛び出した途端、少くとも十数人の人から出たと思われる音量の大きな拍手が聞えます。その方向を見上げると、ビルの中二階から鈴なりの—とその時は思いました—男女が私に拍手しているのです。トラックはと見ると、仁王顔と想っていた運転手が笑顔で、こちらが礼を言う前に、"Good job!" と言ってくれたのです。「下手っばだけど一所懸命やったな」という善意が体に伝わるのを感じました。

繰り返しになりますが、人間関係の原点は相互の信頼にあり、それが巧まぬ誠実さや、おおらかな、いたわりの心から来ることは確かなようです。

(大蔵省印刷局長 47回)

消えた校名

吉田 一郎

定時制高校ということばの始る前に、私は高崎市立高陽中学校を卒業しました。高中学校舎に同居して、下校する高中生に敬礼をしながら登校する、勤労青少年の仲間達でありました。私は昭和十八年に一回生として入学しました。一回生は年令の開きも大きく、担任の先生よりも年上もいて、少年と青年の集団であったが、なかなか面白かった。戦争もたけなわの時代のため、夜間照明の校庭での、軍事教練も熱が入っていた。

このような時代のため、志願兵となつて中退してゆく者もあり、なかには戦死した者もあります。私も二年一学期で中退して、特別幹部候補生となつて軍隊入をして、中支まで派遣されました。昭和二十一年に復員したので、復学しようとしたら四年制となつていて、編入試験を受け再び中学生生活を二回生と共にすることとなり、戦後の混乱の中で、こんどは最年長の中学生となつたわけでありました。なんといっても私達は、カーキ色の青春と、欠乏の世代を過ぎたわけでありました。在学中に高崎地区中等学校文芸連盟の結成に参加して「礎」の発刊（昭和二十三年三月発行）をみたことを、今も青春の思い出としています。旧制中学校を二十四才で卒業した年に、学制改革によつて、新制市立高校（定時制）の発足となり、二回生の半数ほどは残留しました。

こんなことから卒業後は一回生の仲間として、また二回生とも同窓の交りをしていきます。昭和二十五年夏高崎市役所に就職して今日に至りました。現在市役所には一回生で越谷助役、伊藤民生部長、千保図書館長ほか五人、二回生では太田市民課長

● 回想

ボログラウンドと部員不足の時代 ●

高々野球部奮戦記

高田 勉

「ひと降り三日」昭和49年4月から昭和52年3月までの3年間私が在学し、プレイしていたころの高々の校庭は、このような状態でした。水はけの悪さは天下一品、梅雨ときには長靴をはき、フリーバッティングの守備をしたことも鮮明に記憶に残っています。私達の卒業直後、80周年記念事業で今日のようなグラウン

ドになつたわけで、言ってみれば「最後の野武士野球」の現役であつたわけです。当時の野球部は「部員不足」が最大の悩みでもありました。最も部員の多かつた時でも20名足らず、秋など11名という状態でした。いきおい練習内容もマシン相手の打ち込みが主体といったものでした。試合は「5点取られたら6点取り返す」というような荒っぽいものが目立ちました。そんな所から野武士のイメージがその頃まで残っていたのかもしれない。それでも昭和49年夏季大会は本県代表として北関東大会に出場、栃木県代表宇都宮学園と準決勝で対戦、4対3と逆転勝ちをし「あと一つ」で甲子園というところまでいききましたが、向田投手（現富士重工）を擁する前橋工高に1対8と大敗、あこがれの甲子園は夢と消えさりました。その年の秋季県大会は18年ぶりに優勝、関東大会へ臨みましたが、一回戦で神奈川県代表、当時全国に名を馳せていた東海大相模と対戦（当時のサードは原辰徳…現読売巨人軍）、7回に5対5と追いついたものの最終回に大量5点を追加され5対10で敗れました。

このように恵まれない環境にあつても良い成績が残せたのは、「高々」の長い歴史の中に脈うつ野武士の反骨精神があつたからだろうと思います。今、私が高々野球部の後輩に望むことは、恵まれた施設、部員数の中で互いに鎗を削り合い私達が成しえなかつた「オーソドックスな野球」による新しい野武士野球の確立と2度目の甲子園出場の達成であります。

後輩諸君の健闘を心からお祈りいたします。

（浜川西高校教諭 76回）



● 回想

通信教育で得たもの

美齊津 旦

昭和三十三年三月十二日、生涯忘れることのできない、高々通信教育卒業の日である。同窓生には泉静夫、土田トメ、布施川辰市、蔵品健蔵の四人がいる。特に土田トメさんは高初めての女性の卒業生である。泉さん、土田さんは青年学校、布施川さんは定時制から編入し卒業した。蔵品さんと私は全単位を通信教育でとり、県内初めてのことで先生方もたいへん喜んでくれた。当時の田中悦平校長にも校長室に招かれ、ねぎらいのことばを頂いた。

入学したのが三十年六月、この年通信教育だけで卒業できるようになった記念すべき年である。以来五年間、個人指導までしてくれた熱心な先生方、自分の勉強を省みず面倒をみてくれた先輩のお陰をもって、まだ十分とはいえない教育環境の中で四苦八苦してようやく卒業にこぎつけた。

当時入学者は毎年一〇〇人を越えていたが、卒業できるのは数人であった。いかに独学がきついものかはこのことから伺い知れる。幸い私は蔵品健蔵さんというよき友人を得お互いに励ましあいながら頑張った

のが昨日のように思い出せる。卒業後、文部省施行の高等学校教育資格試験（文検）に合格して高校に勤めるようになり、今は高商で机を並べて仕事に励んでいる。

卒業後奥さんの手づくりの料理で歓待してくれた萩原伝先生、家庭のこと仕事のこと、いろいろ相談にのってくれた松原純一先生、主事として面倒をみてくれた故本多三三先生、事務職員として細かい指導をしてくれた平石健三先生、恩師の思い出も多い。

高々通信教育で学んで得たものは卒業資格だけではなく、仲間同志の友情、とても無理だと思った卒業証



卒業記念 高々正門前で S35.3.12

● 回想

書を手にした、やればできるという自信、数えればきりのない程である。田中悦平校長がアルバムに記して

くれた「低く暮し高く想ふ」を座右の銘としていきたいと思う。
（群馬県珠算連盟理事 五十九回）

新高会と私

山田 博久

我々が高崎高校五十二回生として母校を卒業してから丁度十年たった昭和三十八年に期別同窓会の気運が盛り上がり、有志による発起人会がつくられ、どういうわけか私がその代表にまわりあげられることになってしまった。在校時代の成績や品行に拘泥しない母校の伝統と校風が私に幸いしたと言わなければならぬ。

べく交替すべきであると考えたのである。

とにかくこの機会に私は同窓会が組織的かつ永続的に行なわれるようにするため幾つかのことについて立案した。まず名称を「新高会」と名付けた。昭和二十五年春、高崎の名門をくぐった三百名の我々が新制高校の実質的第一期生であったからである。総会は三年に一度開催することにした。当然のことながら総会には同期生全員に連絡することを原則とした。そしてこの会のユニークな規約として会長一任期制というのを考えた。一度総会を主催した代表幹事（会長）は留任しないというものである。私は同窓生のもつ機会均等と負担平等の原則から世話役はなる

この会則草案はこの年の第一回総会で承認され、以来今日まで新高会の運営はこの会則にそって行なわれてきている。ただ会長一任期制については会則通りゆかず、一昨年（昭和五十六年）の第七回総会で岡村品夫君が引継いでくれるまでの十八年間何となく逆らえぬ時流が私を留任させることになってしまった。

私が会長をやめたとき大勢の諸兄から慰労と感謝の言葉をいただいた。しかし感謝しなければならぬのは私の方であると私は思っている。この間私は在学当時にはほとんど巡り合うことのなかった多くの同期生と知り合い、終生の友を得ることができたのは、私が長く新高会会長をやらせていただいたからである。

高校時代の三年間、高崎高校の学舎に蒔かれた三百の種子が三十年の歳月を聞いていま着実に実りつつあるというのが私の実感である。

（新興産業代表取締役 五十二回）

昭和三十七年に初めて米国に住んで以来、米英日英日米と移り住んで、いつの間にか海外勤務の合計が四四年を越えてしまった。この間の国際環境の変化は凄まじく、特に日本の経済成長には目を見はるものがある。二〇年前は米国の新聞に日本についての記事が出る事は稀であり、そのほとんどは日本の紹介や見聞記で、好意的なトーンであった。ところが最近の新聞はどうであろうか。政治、経済、社会、文化あらゆるコラムが日本について頻りに書いている。ここ一ヶ月のニューヨーク・タイムズをみても、シリーズもので「日本の産業政策」「日本の教育制度」「日本の高技術産業」といった記事がほとんど毎日続いていた。すべて良く調査分析して報じているが、こと日米貿易摩擦になると最近ではかなり感情論が入って来ている。

例えば日本の産業政策に対する批判であるが、米国の産業界は次々と日本との競争に負け、失業者が増加し、不満が高まっている。勿論、米国の産業界の力が低下した原因は沢山あり、企業経営のやり方、経済政策の失敗等米国内部の問題が大きい。しかし問題が生じた時、自省して自らを批判しようとするよりも、他人を非難したくなるのが人の常、米国も例外ではない。そこで日本の産業政策、特に高技術産業育成政策などに噛みついてきている訳である。

レーガン政権の主流は自由貿易を推進しようとする人々である。しかし米国の産業界が弱体化して行く状況の中では、背に腹をかせられず保護主義的措置をとる可能性がある。例えば自動車輸入締め出しの「国内部品法」のような過激な法案は拒否しても、「相互主義」のように一見無害な法案には妥協する事は充分考えられる。

このような米国内の動きを見てい

産業育成金を作っているとか、ある事ない事ほじくり出して政治問題化しようとする米国の最近のやり方は、彼等の苛立ちを示している。米国のこの様な世論をみると、また二〇年前の米国と現在とを比較すると、米国人が伝道者の伝統を持つていと言われるのが良く分る。即ち自分が相手より優位にある限り、非常に寛大で親切である。しかしその優位の立場を脅かされると、態度

興と品質向上は日本の生き残りの為に絶対不可欠と多くの日本人が考え努力して来た。日本が国際競争力を強化出来たのは、この認識が各人のものとなって協力したからであった。世界に冠たる国際競争力を達成した今、日本に必要なのは生き残りの為の市場開放であり、その実効をあげるための国民の理解と協力であろう。この分野での政治家の指導力が今、最も望まれる。また同時に、日本は

●論壇

世界の中の日本

清水 明

(野村証券株式会社取締役
米国駐在・ノムラ・セキ
ユリティーズ・インターナ
ショナル社長 54回)



ると、多くの日本人は市場開放が日本の生存の為にも必要であると言う認識が充分でない気がする。日本の輸入制限品目は一部の農産物が中心であり、関税率も世界で低い国のひとつと言う事は事実であるが、それだけで何もしないでいると、他国から市場閉鎖の報復を受け、大きな損失を受ける事もあり得る。専売公社が米国タバコの販売妨害をしているとか、競艇賭博で余った金で秘密の

が極端に変わるようだ。一方、米国にいて日本を見ると、日本人の向上心、目的意識の高さが世界に類のないものと言う事が分る。しかし、日本人はどこかに追いつこうとする時に非常に良い面を発揮するが、追いついてしまうと、日本人さえ良ければよいと言う悪い面が出る。日本があまりに競争社会であるが故に、他国の立場や事情を理解しない欠点がある。かつての高度成長の時代、輸出振

日本人が考える以上に、国際社会で影響力を持ったメンバーである事を知るべきである。当然他の国々の国内情勢にも理解を示さねばならない。私にとっても耳の痛い事であるが、米国の友人が今日もこう言っていた。「日本人は車やコンピュータを売るだけでなく、世界のあるべき姿についてもっと発言し、行動してほしい」と。

三 而中原の矢叫びに
脾肉嘆ぜし幾年ぞ
見よ今稚亀雲を得て
上る飛躍の第一途
六 来らむ戦想ひつつ
北斗を浴びて竹めば
故郷蘭けゆく風霜に
さすが栄枯ぞ偲ばるる

曙 雲 (大正三年度寮歌)

中島 信一 作歌
関 重広 作曲

五 前を望めば渺々の
学海遠く広がりて
九天の碧ひたしうち
風雲次第に相呼びて
怒潮となりてうづまけど
胸や千仞わだつみの
八重の血潮の高湧きて
進む健児の意気たかし

高中で歌っていたものが地名を変えてそこにあった驚き、そっくりさんが苦いルーツの所以でもあった。然し兩人共落胆しつつも村田の翠轡を心情として認めている節がある。村田のプロファイルは京浜同窓会誌(昭和五十六年五月発行)の甲子園の翠轡(四十六回関根望)に村田の妹、青柳芳子と村田と同期の幼稚園からの友人である清水元寿との伝聞を重ねて詳記されている。

ここに清水元寿の手になる遺影を掲げた村田鎮虎追悼録がある(昭和

五十八年十月五日発行)。母校の翠轡文庫にも寄贈されているので、是非御一読され度い。関根の記述との重複をさけるが、村田の才能の一端を確信出来る資料を清水から提供された。追悼録にも中学仲間として集録されているが同人雑誌「群盲」である。村田はペンネーム高村淳として宇野浩二の創作、戯曲を寄稿し、同人最大の寄稿者であった。第六号(大正十四年八月発行)に掲載の文化的感性豊かな感想曲「地平の秋」と「博多だより」を終稿として同年十月五日に天逝した。必然的に「群盲」は第六号で廃刊となった。

ちよつと剽軽でオマセでシャイであつた坊ちゃんに幼くして頓敏であつた事(天田・清水・中野・蜂果・山口)は応援歌発表の光景を描いた中学仲間の「村田鎮虎君」からも窺える。当時の中学生の旧制高校に対する憧憬と羨望は現代の比ではない。旧制高校寮歌が軍歌と並んで当時のヒットソングでもあつたろう。

高中国漢の教師、村上成之作詞の校歌(大正四年制定)は「煙も見えず雲もなく」の曲で歌われていたが固すぎるといふ評で生徒の間では、村田の応援歌が良く歌われていたという(蜂果統三)。山口準郎は下校時、午後四時頃本町通りを高唱した思い出を語っている。時代背景を捉え、権力に抗し沸騰として起きた大正民主主義の歴史として生徒の愛唱

歌を消すべきではない。借用であつても、問題ではない、古い校歌を反古にし、それに飛びついた村田を始めとする若い生徒の意気と熱情こそ貴く、高高の歴史に残すべきである。しかしそれはあくまで、生徒自身の民主的な行動記録としてであつて堅苦しく校史に借用歌として認めることは、名譽ある高高の歴史に盗用の汚名を残すことで賛成出来かねる。

借用の事実には生徒に隠す必要はなく、時代の革新の波になつた若々しくも微笑ましい情熱の発露として、歌うも語るも全て、生徒の自由によだねるべきである(木戸又次、大塚葛造)。

秋の運動会を目前にし、生徒の士気を昂揚するために拙速主義を採らざるを得なかつたのかも知れぬが顔に汗し作歌に没頭していた姿が眼に浮ぶ(清水)。毎日、榛名を仰ぎ、鳥の流れに親しんだ彼には口の中から自然に流れ出た言葉である。その自然さが当時の我々には非常に嬉しく歌われた(山口)。昔の中学の四、五年生が後々まで歌い継がれる様な名文を創作するのは無理な話、世の中には良くある事である。まあ勘忍してやつて下さい(天田利夫)。

XY生は民謡「佐渡おけさ」「北海盆唄」の由来を説き、少年期の替え歌遊びを懐古し、六十有余年二万人の同窓生の血肉になり歌い継がれて来た事実は疎に出来ない(池田、XY生)。翠轡はもはや完全に血肉

であつて借物ではない(西村)。十九回の串戸恒吉の示唆に依る、二十回で八高東大と進学した柳沢米吉は八高人学時、同じ様な寮歌を知つて疑問に思つたが、昔から耳に残っている言葉であり、村田が盗作ならば、八高の寮歌も盗作であると考えた。どちらの歌も大好きで今でも良く歌っているが、途中で文句が入り乱れるとの事、今更議論の余地なし、この歌を大切にしようとの結論であつた。関根も八高出身者と共に翠轡を交互に歌つたが、わが翠轡には厳然たる創造性があり、オリジナルである事を両者で確認している。

人生いたる所に青山あり、山紫水明に翠轡あり、詩歌作法としても海山は対蹠であろう。換骨奪胎だったかも知れぬが今や二万余の同窓は勿論の事、高崎市民の人口に膾炙された翠轡はむしろ創作として喝采を博すべきかも知れない。八高寮歌雲の作曲者関重広は、全国高校寮歌五百曲を集めた「寮歌は生きています」歌曲集のうち第一節が類似している曲を四曲見付けている。

八高のものは八長調、高高のそれは八短調。両方共にドからミに行くが作曲作法の基本である意図が同主調であるが異なっている。リズムもメロディも違う。アルコールが入れば多少似ているかも知れないが、素人の耳でも八高寮歌(翠轡影を・曙雲紅霞む等々)とわが翠轡とは全く異

質なものであった。

問題提起(西村・昭和四十七年)

されてから十一年、村田の同期の方
方から貴重な資料を得たがまとめる
能力の無さが口惜しい。先輩の意見
を尊重して結論としたい。この問題
から次なる提案がされている(天田
利夫・高橋邦雄・讃岐和家)。渦中
の人であつた清水の論説を掲載する。

新応援歌作定の提唱

応援歌「翠巒」が故村田鎮虎君に
よつて発表されてから六十数年にな
る。その間、祖国日本は未曾有の激
動期に遭遇したが、この応援歌は高
らかに歌いつがれて来た。

願れば当時のわが上州からは一人
の平大臣すら輩出されていなかった
と思うが、今や、七年前に高中二十
一回卒の福田起夫先生が、又昨年は
三十五回卒の中曾根康弘先生が首相
になられた。茲に名門高崎高校の磐
石の基盤が出来上がったと言つてよ
いであろう。

そこでこの画期的な時季に当
つて新しい応援歌を制定しては
どうであろうか。明るくて朗ら
かに歌える若き学徒の歌を……
そして引続き第三第四の首相を
送り出そうではないか。いやいや
や政界ばかりではない科学面に
於ても尖端技術の探求は二十一
世紀の世界各国の国民生活に大
きな変革をもたらす事になるであ

ろう。

名門高崎高校はその榮譽を維持発
展させる為に、視野を広くして対処
せねばならないのである。

上毛野の山河は高高健児に活力を
吹き込む四季をまだまだ豊富に蔵し
て居り、土屋文明先生を始めとする
豊饒な詞藻がある。又井上房一郎先
生の率いる音楽の泉がある。作詞作
曲には事を欠くまい。学校当局と校
友会の役員は直ちに立上り相協力し
て一日も早く新応援歌の実現に努力
されんことを切に願ひする。
郷土の自然を豊富に取入れた親し
める歌。明るくて若人がおのずから
唱いたくなる曲。唱っているうちに
決意の湧き立つ詞。以て、上州健児
の士気を鼓舞昂揚し、目的達成に邁
進する氣力を育成する応援歌の出現
を期待するのは私一人の願望だけで
はないと思う。(原文のまま)



翠巒文庫(その二)

*卒業生の皆さんがお書きになったもので、学校へ寄贈なされた本。

角田 匡己 (53回)

書名

著者

書名

著者

特殊鋳造法

植原寅蔵

課税権力の本質

新井隆一

大手拓次全集

大手拓次

自治行政の法律知識

橋本一明

わたしのアルバム

高橋邦雄

税務行政の法律知識

橋本一明

幸福を求めて

田島喜三郎

税法の原理と解釈

橋本一明

出かせぎの歌

門倉 諒

税法・権力・納税者

橋本一明

あなたの神は小さすぎる

清水記嗣

税法判決詳解

橋本一明

イースターの朝のできごと

清水記嗣

ランボオ

橋本一明

不死へのいざない

清水記嗣

アラゴン・エリュアール・プレヴェール

橋本一明

ビリーグラハム 上下

清水記嗣

モーツァルトの葬儀

橋本一明

歌集 藍色の谷

山下和夫

二行詩 鴛鴦

石原 亮

大手拓次研究(大手拓次全集別巻)

岡田豊彦

文芸瑣玉

南雲今朝雄

樹林

岡田豊彦

優秀性

讃岐和家

忘れ霜

山下和夫

なつかしき・かなしき・すばらしき

橋爪良恒

確氷のほとり

山下和夫

歌集 青き焰

原 一雄

群馬県古城址の研究上

山崎 一

歌集 雪天

土屋文明

純粹精神の系譜

橋本一明

短歌入門

新井哲夫

シモーヌ・ヴェーユ著作集 一―五

橋本一明

群馬文化一三三

新井哲夫

世界文学全集十一

お屋敷町

群馬文化一三三

新井哲夫

征服者・王道・他

征服者・王道・他

群馬文化一三三

新井哲夫

ヴェルレーヌ詩集

征服者・王道・他

群馬文化一三三

新井哲夫

二十才のエチュード解説

新井隆一

天狗岩堀史余録

堀口昭夫

新税法入門

新井隆一

あしたの歌

堀口昭夫

地方自治法講話

新井隆一

風灯

小山長四郎

税法の知識

新井隆一

中学時代絵日記

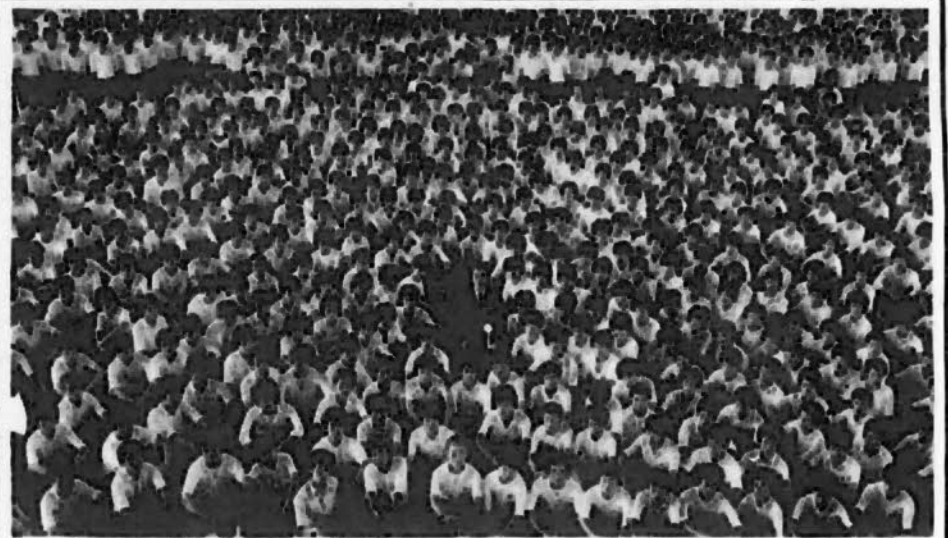
山口 薫

財政における憲法問題

新井隆一

異国の花

安居次夫



中曽根首相母校来訪

写真提供 岩山猛氏(49回)

今夏お国入りした中曽根首相(三五回)は、御多忙の中、母校を訪問された。七月三十一日午前十時、生徒職員、同窓会PTA役員約千名が体育館で待ちうける中、登壇された首相は、「卒業生のひとりとして」と題する記念講演を約二十分間にわたって行なわれた。時にユーモアをまじえて熱っぽく語る首相のことばに、生徒たちは緊張しつつもうなずいたり笑顔をあげたりしながら真剣に聞き入り、深い感銘を青春の心に刻みこまれたようである。

若き後輩たちのために、「自分が

が必要である。政治家は、文化・学問・政治の権化としての資質を備えねばならぬ。」(なお、この講演の全容は十三頁の冊子として寄贈され生徒・職員全員に配布された。)

講演終了後、「人生開拓」と揮毫。そのあと首相を真中にして生徒全員と記念撮影。握手を求める生徒の「いなかの大群」にもみくちゃにされた首相は、満足そうに微笑みながら「翠巒」におくられて母校をあとにされた。現役首相として生徒たちに深い感動を与えて下さった首相の益々の御活躍をお祈りいたします。

どう形成されてきたか」を柱に、エピソードをまじえ、「文化」「学問」「政治」のかかわりについて話された講演の概略は次の通りである。「日本人が日本文化を体得せずして政治はできない。学生時代に学んだ西田哲学や道元とかの日本古来の思想と西欧思想とが、今自分の中に融合して指針となっている。また、高中の恩師から学んだ英語の発音等の基礎が身について今に生かされている。これから深い教養を身につけ、二カ国語を話せないと国際派とは言えない。サミットでは、絵・詩・音楽の話題でも対等にわたりあえる教養

柳川に遊ぶ

中島 広志

或る秋の一日、柳川に遊んだ。

柳川市に、現代風の賑やかな見物のないことは想像できたが、私はこの柳川行きを心から楽しみにしていた。その昔習った中学校の教科書に、北原白秋の柳河市(昔は河と書いた)に関する文章があった。常は気障っぽい、やせて青白い、背の高い国語教師が、さすがに授業は素晴らしく、彼の口からはとばしる熱っぽい口調と共に、柳河市の印象は胸深く刻まれた。しかし上州生まれの十五才程の少年にとつて、九州は余りに遠く、

将来柳河を訪れる機会があるうとは思われず、柳河は夢のまこととなり、ただ憧れの対象となった。三十余年を過ぎ、私はもう、かつての少年ではないけれど、柳川を訪ねることが現実となったのである。

「肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流れを越えて、わが街に入りくる……」と白秋は書いた。地図をみるとその通り、柳川は四方八方へ路が通じている。だからさだめし賑やかな所だろうとは思わなかった。文章にあった「要するに柳河は廃市である」その面影が残

っていると期待していたのである。「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のほひには日に廃れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐しい影を映す」

旅行の主たる目的は市内を流れる堀割りの川下りである。さて一行、早くも座を占めて待つうちに、三十そこそこと思われる船頭さんも乗り込んで、舟は流れに桿さした。

川の水は少し濁り、川底の藻をねじらせてゆつくり流れていた。白秋の昔は、水は清らかに流れて廃市に入つたものの、廃れはてた遊女屋の厨水が流れ入り、洗濯女が布を洗い、湯上がりの素肌しなやかな肺病娘が唇を覗き、蛇が奔つたりすれば、やがて海近き沖の端の鹹川に落ちてゆく頃には水底のものの悉くが透けてみえるというわけにはいかなかったろう。だから水が薄濁つていても汚いとも思わなかったし、柳河に対する夢も破れなかった。「水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の檻」であれ

高々をみまもる

風と緑の観音山丘陵 (2)

観音山丘陵——高々で学んだ同窓生にとっては、親しみのある丘陵にちがいない。四季折々に変化してみせるこのゆるやかな丘陵には、数多くの文化財が点在している。豊富な緑とともに、高々を背後からつつんでくれるこの観音山丘陵は、高々のすぐれた教育環境を構成する大切なファクターである。そこで、高々の学園生活の中で、折りにふれて歩き、遊んだことのある観音山丘陵の自然、文化財、史蹟等を紹介していこうと思います。

白衣観音

高崎のシンボル白衣観音は昭和十一年秋、建立された。高さ四十一・八メートル。山頂にそそり立つ威容は、さすがに巨大な観音像の迫力をもっている。



胎内に入って、二十体の極彩色の仏様が祀られている階段を上まで登ると、関東平野最北端からの眺めは、むろんのことすばらしく、快晴の日には遠く富士の峰まで展望できる。

洞窟観音

観音山山頂にのぼる手前にある洞窟観音は、柏崎の人山田徳藏翁が昭和二年着工したもの。約四百坪の洞窟内に三十三体の観音像や石仏がおさまられている。

うっそうと繁る林の中に、野趣に富んだ庭園もつくられていて、昼間でもひんやりとして静かなところ。



ば水も灰色が似つかわしい。

昔は「水面の随所に、菱の葉、蓮、真菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様様の浮藻の熾烈な更紗模様の中に微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出す」のであったというが、菱も蓮も、水路を整備してから絶えてしまったそうである。真菰は岸辺の水を埋める程、繁りに繁っていた。

沖の端の終点近く「お花」という昔ながらの大庭園をようする大邸宅がある。入場料をとって柳川累代の城主の用いた武器その他を覽せていた。その庭から堀割りの水面にまで枝を張って楠の太木が何本も繁っている。その梢を見上げながら、「若葉の頃が一番いいんですが」と船頭が言った。私は答えて言った。

「今頃も情緒があつていいですよ」確かに廃市柳川をみるのは秋が相応しい。秋は柳川を送る自然の挽歌である。

「お花」を廻るほり割りの終点近く、始めて懐かしい白壁をみつめて私は喜びの声を挙げた。国語の本の二つの写真が印象に残っている。一つは舟の上から撮ったかとも思われるもので、種々の水草の向うに岸があり生垣の中に人家が見える。白秋は此の岸辺の道を通って、沖の端の家から柳河の伝習館中学に通ったのであろうか。もう一つは枝垂れる柳の向うに酒倉の白い壁が水に影を落としている写真である。この白壁がな

くては柳川ではないと一人決めて気負い込んでいたのである。その白壁が舟を上げる直前にあつた。

だが「青い股引きをつけた櫓の実際の姿」もなく、「うらわかい町の娘の順礼の姿」もみられず、まして「何処からともなく漂浪うて来た傀儡師の肩の上に、生白い華魁の首がカックカックと眉を振る物凄さ」に胸驚かすこともない。だが時の流れと共に街も人も変らざるを得ない。これは仕方のないことである。しかしゆるやかに進む舟のごさの上に坐し、くぐり抜ける柳のしだれに手を伸ばし、今日的な風物には目をつぶって昔を偲ぶとき、柳川の一日はまことに懐しく楽しい日であつた。

柳川に在る時、私は柳川に、変りゆく故郷を見、十五才程の少年の昔に在ったのである。

胸の疼くような、喜びとも、旅の愁いとも言えるこの感慨は、ひっきりやう誰もが感ずるところの、移りゆく故郷への、年経る我が身の幼き日への、郷愁であつたのだろう。

(箱根療養所医長 44回)



同窓会だより

京浜地区

中曾根信雄

39回

京浜地区高々同窓会は今春五月に予定していましたが、中曾根総理の都合がつかず、秋にもちこし九月十四日に中曾根総理就任のお祝いと新入生の歓迎をかねて赤坂海運ホテルで盛大に開かれました。勿論お忙しいところを万障繰りあげて総理も出席し、お国入りの際母校を訪問し若い高校生と肌のふれ会う楽しいひとときを過ごしたことや、これからの日本が世界に果たす役割りやご自分の信ずる道にしたがって、日本丸の船長として責任を遂行したいと力強く挨拶し同窓生に深い感銘をあたえました。

開会の辞と進行は井上工業の飯島さんがヤングパワーの代表として大変そつがなく、見事でした。

会長挨拶には高岡会長のかわりに南雲先生が新入生に激励と温かい心に沁みる話をして頂きました。会務の報告は私がしたのですが、中曾根総理の到着が遅れていたため、時間を延ばす為に脱線し、私が高々の先生をしているとき代議士に立候補する為に母校を訪れた康弘さんのことや、高崎に赴任するまでいた阿波池田高校の思い出など話しました。

歓迎の辞は上利幹事長が経験豊かな人生の指針について新入生に有意義なお話しをして頂きました。

その後新入生の代表の謝辞があり、米賀祝辞には原同窓会長と学校長が母校の現況について詳しく説明してくれました。いっしょに志村先生や多数の先生方も出席して頂き、大変有難く思っています。遠いところ大変御苦労様でした。

総理就任祝辞は京浜同窓会を代表三十四期の高橋健人さん（現立教大学学長）が祝辞を述べ、高々同窓会が如何に素晴らしいことかを強調しました。閉会のあと新入生とともに祝宴にうつり充分飲みかつ食べ最後に肩を組んで翠轡を大合唱し、散会しました。歌のリーダーは言うまでもなく、万年青年の高崎駅東口に「上毛三山」の彫刻をつくった半田さんです。皆様の御健闘をお祈りします。

(洋画家・一水会会員)

通信制

早乙女七五三男

65回

三月六日（日）通信制同窓会の総会が高崎神社新生会館で開かれました。これは規約により例年三月に開かれておりますが、ことしは隔年の役員改選の年にあたり、その改選が行なわれました。主な新役員は次の

諸氏です。

顧問

原 一雄（同窓会長）

水穴再喜（校長）

小林伸治（通信制教頭）

会長

早乙女七五三男（八回）

副会長

鷺尾 好美（七回）

儘田 勝（二七回）

北村ヒデ（二〇回）

幹事長

尾張久雄（一九回）

その他会計報告や行事報告等、議事をこなすこと一時間余りで終了して隣りの室へ、そこでは新卒業生、在校生、旧職員、現職員を混じえての大卒業祝賀会が待ちうけているのです。約九十名にもなる華やかな賑わいは結婚披露宴を思わせるようです。卒業することが非常にむずかしい通信制を無事終了して、新しく同窓生になるにあたって、我々先輩としてその苦学を充分に経験して来た者が、祝福してあげてこそ生涯のよき思い出となり、ひいては在校生の卒業へむけての励みにもなるであろう。この会は今もう二十数年も続いておりますが、正式に通信制同窓会の運営となつたのは、まだ三年目でした。

さて、こういう成功に気をよくして幹事諸氏、納涼懇親会を企画し、八月二十一日（日）美家満町店にて原一雄同窓会長を迎えて開催しました。参加者十八名でちよつとコン

パクトな会でしたが女子九名の参加がいろいろ添えてくれました。

これらを運営するため、幹事十二名で隔月に一回幹事会を設けて会合を重ねて来ましたが、最も悩みとするところはやはり会計面です。会報を年一回発行して、総会の往復はがきを出すと通信費だけでも相当なものです。そこで今後の方針として地区別支部を結成して維持会費の徴収やその他の連絡を密にして、なるべく会合へ出てもらうように方向づけをして行く考えです。

写真は総会のあとの祝賀会がすでに終わろうとして、「翠轡」の斉唱中の模様です。

(駒山田商店勤務)



ヨーロッパ

演奏旅行

諸江 修

今夏、私は同志社グリークラブのメンバーとしてヨーロッパへ演奏旅行に行ってきました。同志社グリークラブは、日本で最も古い合唱団で、実力も日本のトップレベルにあります。私は同志社大学入学と同時にグリークラブに入部し、昨年夏からは幹事長(部長)となり、今回の演奏旅行では副団長(学生代表)として六十名の大所帯をまとめてきました。スイス、オーストリア、ハンガリーの三ヶ国で十一回、三週間の演奏

旅行——チューリッヒの大教会やウィーンの宮殿でのコンサート、スイスの山でのハイキングなど——は、私の大学生活の最大の思い出となりました。大学四年間、クラブばかりに打ち込んできましたが、合唱を通して友情と忍耐力(毎日四時間の練習)が生まれたと思います。

(同志社大学 79回)

東北大と高々と

中野 眞一

もう三年も前です。受験で仲間と仙台駅につき、改札に向かうと、大きなよめきが起こっています。のぼりや旗をあげての各高校OBの受験生出迎えでした。



チューリッヒ湖畔
リヒタースヴィル教会にて

胸8割実力2割、親のつきそいマイナス5割」などという看板も。その中でもひととき大きく「高崎」と先輩らの声。旗をもって叫んでおり

ました。駅内で翠轡を肩をくんでうたった後、一人一人の健闘をエールに祈ってもらい宿まで送ってもらったり合格発表の電話連絡をしてもらったりいろいろ世話になりました。

大学生生活は忙しいけれど充実しています。高校時代が遠くなっていると思いますが、年に何回かの高々OBの集まりは、よき時代、高々の日々を思い出させてくれます。

(東北大 80回)

私の大学生活

藤井 靖久

私が大学に入学し、はや一年半が過ぎた。医学部という性格上、カリ



キュラムのきついことは、ある程度予想していたが、やはり厳しい毎日を送らざるをえない。月曜から土曜までびっしりつまった時間表、難しい試験、本当に息がつまりそうになる。そんな私の救いとなるのが、クラブ活動である。私はヨット部に属しており、毎週末練習に励んでいる。潮風をあびながらのセイリングは最高の気分、いやなことなどふきとんでしまう。公式レースではなかなか勝てないが、優勝を目指して部員一同頑張っている。「大学生・楽・遊び」といったイメージとは無縁の生活であり、来年からは医学実習が始まり、ますます忙しくなりそうだが、自分を見失わずに、勉強、運動にさらに努力したい。

(東京医科大学 81回)

大学生からの便り

●運動部活動報告

全国総体に初出場

弓道同好会

今年の大事業である「あかぎ国体」も、予想以上の好成績で終了いたしました。本校関係者も役員で百余名が参加、選手では教員2名、生徒は3競技にわたり大活躍し総合優勝の原動力となりました。3ヶ年間にわたる過酷とまでいわれた強化事業に耐え、気力・体力共に充実し、彼らの青春の一ページに強くきざみ込まれたものと思います。

さて、本校各部の活動をみても、例年に比べても劣ることなく各競技、各大会に出場し、活躍をしております。年々各部ともに部員は増えており、運動部活動の必要性を実感しております。

春の県高校総体では、総合三位でした。団体競技においてやや不振な成績がみられますが、大会期間中でも、中心選手が団体強化事業に参加しており、どうも思うように調整ができなかったようです。しかし、それでも各競技上位には落着いており、伝統の力にささえられているものと思います。

関東大会へは4競技、全国総体へはやはり4競技が出場し、その技を試してまいりました。中でも、創設以来まだ日の浅い弓道同好会におい



て、全国大会へ柳沢志好君（三年）を出場させることが出来たのは、地味な活動の中に、着実な努力が実ったものと大変喜んでおります。

新年度に向け各部指導者、選手ともに、母校「高々」の名譽にかけて頑張ります。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

●野球部

春季大会準優勝 関東大会（水戸）準優勝 夏季大会ベスト8 秋季大会2回戦

●ラグビー部

県総体4位 一年生大会準優勝 あかぎ国体2名出場

●バスケット部

県総体4位 あかぎ国体3名出場

●バレー部

県総体ベスト8、全国予選ベスト8

●陸上部

県総体 総合4位 走高跳優勝 走幅跳3位 400m H3位 関東大会（宇都宮市）5000m 5位

400m H6位 全国総体出場

学校対抗（1部）総合5位 走高跳優勝 走幅跳2位

●サッカー部

県高校総体準優勝 全国予選準優勝 あかぎ国体1名出場

●軟式庭球部

県総体ベスト8 関東大会（伊勢崎市）団体ベスト8 個人3位 全国総体出場

●柔道部

県総体団体ベスト8 全国予選出場

●剣道部

県総体2回戦 全国予選1回戦

●水泳部

県総体総合4位 関東大会（東京）

出場

新人戦 400m メリ優勝 400m リ優勝 400m 自優勝 200m メリ優勝

100m 平2位 100m バ3位 200m バ3位 200m 平3位

●卓球部

県総体2回戦 一年生大会ベスト16

●登山部

県総体出場

●硬式庭球部

県総体団体準優勝 個人ダブルス優勝 関東大会 全国総体出場

●弓道同好会

県総体個人2位 全国予選個人2位 全国総体（静岡）準決勝進出（運動部長 中原射鹿止 55回）

最近の進学

状況について

新教育課程の実施に伴い、今日、多様化する生徒のニーズに対応した教育的努力をかかえている小・中学校を終えた生徒たちの「学力」は、昔とは比較にならぬ程多岐にわたる変化しております。これらの多様化した生徒たちが、大学進学希望一〇〇%の本校に入学してくるわけですが、高校三年間に、大学入試問題にどれだけの点を獲得できるかの能力（当面の学力）と、子供たちの将来の進

路に本当に必要な能力とをいかに両立させて育てていくかを、学校長を始めとした全職員が日夜、悩みつづ、工夫し合つて全力で進路指導にとり組んでおります。

特に本校生徒の多くが志望する有名校の入試は、想像以上に難化しており、現役苦戦が続いております。幸い、生徒自身も進路に対する情報を集め、早めに目標を定めて、勉強を始める気風が出ておりますので、それなりの成果は期待しております。今年も、三〇〇名程が共通一次の出願を終え、また、早慶などへの推薦入学者も内定しました。他県に比し、必ずしも好成績とは言えぬ本県の進

●学芸部近況報告

小・中・高、一体となった群馬県理科研究発表会が、過去三十年間毎年群大で行なわれている。昨年も三百に近い研究発表が行なわれた。そのうちで優秀なものが各部会毎に何点か選ばれて、毎週金曜日に上毛新聞に掲載されている。昨年度の選考で、高々では生物部と物理部の研究発表がこれに該当した。

生物部 戦後三十八年間でおよそ三百人の部員を送り出している。

その間昭和三十七年および三十八年には、その研究発表が読売学生科学賞の群馬県審査で最優秀賞を、又五十六、五十七年連続優秀賞を獲得している。次に群馬県理科研究発表会で昨年度選ばれた生物部の研究発表二点をあげてみる。その一「水生昆虫の研究」碓氷川、烏川の水昆研究過去五年間の積み重ねである。

採集分類された種はおよそ十萬匹で、膨大な資料のまとめという苦労はあるが、そこから生み出された結果は貴重なものである。その二「カワセミの観察」移動のはげしい、カワセミという鳥類の生態研究は大変なものがある。一日に得られるデータはごくわずかである。こうしたユニークな忍耐の研究が選ばれた理由

であろう。

物理部

学芸部棟三階に三十余名の部員が集い、研究開発と親睦の日々を送っている。狭い部室に少ない部費。不十分な設備ではあるが、マイコン・無線・リニアモーター・マニピュレーター・マイクロマウス・航空機などの班を組織し、精力的な活動を行っている。翠濤祭はもとより、県理科研究発表会への出展、各製造会社のコンピュータのモニターなどにも進んで参加し、ソフトウェアコンテストなどでも、すぐれた作品を生み出している。特に去年の県理科研究発表会において、マニピュレーター研究開発班の出品は、理化部門で優秀作品に選出され、その設計面での独自のアイデアが十分に評価された。今後の部の活動に期待して頂きたい。又、経済的なバックアップをして下さった先輩方に感謝したい。

(学芸部長 田島秀雄 41回)



活動中の物理部員

学状況ですが、本校生が、リード役になって善戦してほしいものと思っております
(進路部長 経徳弘康)

進学状況(全日制) () は現役

大学	年次	56年	57年	58年	大学	年次	56年	57年	58年
北大		5(2)	5(0)	3(1)	経大		35(16)	44(15)	18(8)
東北大		20(12)	24(13)	13(7)	早大		65(16)	54(21)	57(8)
東京大		10(5)	4(2)	10(6)	慶応大		35(12)	19(7)	27(7)
一橋大		2(0)	4(2)	3(1)	中央大		57(16)	44(14)	33(6)
東工大		7(5)	2(0)	6(2)	明治大		55(16)	57(16)	68(7)
千葉大		7(4)	5(3)	5(1)	日本大		36(4)	24(3)	25(5)
京都大		8(5)	1(0)	3(0)	上智大		12(5)	7(1)	16(5)
新潟大		12(10)	8(6)	11(5)	法政大		28(3)	17(4)	32(3)
筑波大		6(5)	6(4)	5(3)	立教大		25(9)	16(5)	17(1)
金沢大		6(4)	7(5)	4(3)	東京電機大		10(1)	4(0)	7(1)
東外大		1(0)	5(2)	6(1)	東京理大		41(14)	44(8)	22(4)
群馬大		60(38)	58(34)	46(28)	芝浦工大		7(2)	5(1)	5(2)
横国大		10(7)	5(2)	13(6)	成蹊大		7(2)	10(2)	6(0)
静岡大		0(0)	2(1)	2(0)	学習院大		6(2)	8(1)	1(0)
山梨大		1(0)	1(0)	1(0)	青山学院大		25(12)	21(9)	15(3)
埼玉大		4(2)	3(0)	2(2)	武蔵大		2(0)	6(0)	2(1)
信州大		5(4)	4(1)	0(0)	同志社大		3(1)	6(2)	8(5)
横浜市大		2(2)	0(0)	0(0)	立命館大		10(0)	4(0)	4(2)
					その他		16(35)	16(43)	16(36)

種別合計(全日制)

進学率 合格者数 受験者数	現役進学 者数	卒業 者数	総計 (延数)	D短大、 各種他	A+B+C	C 私立	B 公立	A 国立	大学別
48.1%	185	402	807 (27)	8 (7)	799 (270)	563 (138)	45 (20)	191 (112)	56年
40.7%	161	405	710 (23)	8 (3)	702 (22)	471 (122)	61 (22)	170 (83)	57年
36.3%	138	401	662 (17)	10 (5)	652 (165)	476 (86)	26 (8)	150 (71)	58年

昭和57年度 高々同窓会通常会計報告

(昭和57年1月～12月)

収入の部			
費目	昭和57年度予算	実収入	備考
前年度からの繰越金	468,683	468,683	
入会金	830,000	862,000	全日制通信5転入1
維持会費	2,500,000	4,102,130	
利息	20,000	65,234	
合計	3,818,683	5,498,047	

支出の部			
費目	昭和57年度予算	実支出	備考
会議費	250,000	413,520	理事会、幹事会、総会
祝賀費	150,000	223,680	祝金、卒業ケース等
餞別費	300,000	197,000	転出職員への餞別
慶弔費	100,000	67,000	香典、花輪
通信印刷費	400,000	378,560	ハガキ、切手、振込用紙
旅費	80,000	47,600	京浜同窓会出席
總會通信印刷費	1,000,000	839,150	總會通知等発送
同窓会報費	350,000	650,000	同窓会報印刷
事務費	600,000	748,960	人件費
井上、真木、同窓会長賞費	100,000	82,900	工芸硝子、プレート代金
雑費	50,000	17,000	
予備費	438,683	561,000	翠樹体育会補助、図書補助
同窓会基金へ		500,000	
次年度への繰越		771,677	
合計	3,818,683	5,498,047	

昭和57年度 高々同窓会特別会計

(同窓会基金)

(昭和57年1月～12月)

収入の部		支出の部	
費目			
前年度からの繰越金	3,862,758	なし	
利息	178,722		
金井・松山・海老原氏より	300,000		
昭和57年度経常会計より	500,000		
合計	4,841,480		

残高合計 4,841,480
(高崎信用金庫西支店、定期)

昭和58年度 高々同窓会通常会計予算案

(昭和58年1月～12月)

収入の部		
費目	昭和58年度予算	備考
前年度からの繰越金	771,677	
入会金	860,000	全日制通信5
維持会費	4,000,000	
利息	70,000	
合計	5,701,677	

支出の部		
費目	昭和58年度予算	備考 ○増 △減
会議費	700,000	○ 450,000
祝賀費	300,000	○ 150,000
餞別費	200,000	△ 100,000
慶弔費	150,000	○ 50,000
通信印刷費	500,000	○ 100,000
旅費	80,000	0
總會通信印刷費	1,000,000	0
同窓会報費	900,000	○ 550,000
事務費	800,000	○ 200,000
井上、真木、同窓会長賞費	100,000	0
補助費	400,000	新設(翠樹体育会、図書補助)
雑費	50,000	0
予備費	521,677	○ 82,994
合計	5,701,677	○ 1,882,994

昭和58年1月22日

高々同窓会校内幹事会計

原田光男 茂木道弘 設楽春樹

「クラブ活動振興基金」

30,000,000 (群馬銀行・高崎信用金庫 定期)

利子は管理委員会(委員長 同窓会長)が運営する

昭和57年度 事務報告

57年1月23日(土)	総会
3月24日(水)	本部幹事会
4月20日(火)	本部幹事会
4月30日(金)	常任理事会
5月20日(木)	本部幹事会準備会
5月28日(金)	京浜同窓会
5月28日(金)	本部幹事会
6月24日(木)	理事会
7月12日(月)	常任理事会
8月4日(水)	本部幹事会
11月16日(火)	本部幹事会
11月20日(土)	理事会
12月10日(金)	常任理事会

事務局だより

図書御寄贈へのお礼

58・10・14 田中順氏(五一回)より「古文書時代鑑」上・下巻(東大出版会)

58・11・5 三一会の五十七人の

方々より卒業後五十年を記念して、平凡社世界大百科事典三五巻、河出書房世界文学全集百巻、新潮社日本古典集成五五巻、計五十万円。当日三一回を代表して、須永誠一氏、高橋正次氏、松本栄氏が来校、目録を

高崎高校同窓会報 第17号 発行日・昭和五十八年十一月二十八日
発行・高崎高校同窓会 編集・本部幹事会 印刷・出版あさき社

学校長に手渡されました。

他に、同窓会より図書購入費として二十万円いただいております。

新名簿完成

四月に完成し、購入者に発送されました。歴史をたどり、より親睦を深めるために御活用下さい。

屋内総合体育館完成

昨年度着工、今春校地内西北隅に完成しました。一階に柔道場・剣道場、トレーニング室、管理室、二階はバスケットボールコートが一面とれるフロアーになっており、体育の授業、部活動に利用されています。また、学芸部室棟の西には二五米九コースのプールが完成しました。

なお、同窓会を中心にして、トレーニング機器購入(一千万円)のための御寄附を募っております。御協力をお願いいたします。

編集後記

依頼した方全員から心のこもった原稿を頂き感謝申し上げます。会員諸兄の絆を深める一助ともなれば幸いです。校庭の色づいた銀杏もだいぶ散りました。年末、年始を控え、諸兄の益々の御活躍をお祈りいたします。(本部幹事・校内幹事)